

初期大乘經典におけるボサツ

八 力 広 喜

かつて私は『十住毘婆沙論』(以下『論』と略す)における敗壞のボサツについて検討したのであるが、この折もつばら

検討をのこしているので、以下、それを中心に論ずることにしたい。

『論』を中心として敗壞のボサツが『迦葉品』の中から引用されて、『如來智印經』とともに『論』のボサツ思想の大きな特徴を形成していることを示した。その中で、「敗壞」という用語の原語 (Khaduṅka or khatuṅka) については、原始仏教聖典から大乘經典にいたるまで幅広く用いられているにもかかわらず、仏教用語として定着していないことも確認した。このことばの本来の意味は、「未調教な」「ならされていない」という、元來馬の調教に関することばであり、形容詞として用いられることも判明した。ただ言語上必ずしもその語源が明瞭ではなく、そのことが漢訳語として統一されていないことにもあらわれていると思われたのである。敗壞に関して以上のようなことがほぼ明らかとなっており、さらに敗壞のボサツに関して検討する必要があるとも考えられるが、『迦葉品』の註釈『大宝積經論』(以下『經論』と略す)の

『經論』は、すでに學者に注目されているように『迦葉品』の内容を『經論』という註釈を通して『瑜伽論』撰訳分と『撰大乘論』という瑜伽行唯識派の論書に影響を及ぼしているという事実が指摘されており、そこでのボサツ思想の変遷に注目しておく必要もあると思われる。ただここでは「敗壞のボサツ」に関する部分から逸脱しない範囲で検討しておくことにしたい。

『迦葉品』において敗壞のボサツとは、次の四法のことである。⁽⁴⁾

- (1) 教えを聞いて傲慢となり、(その教えに従った) 実践をしない。
- (2) 教えに対して、傲慢な性質となり、師匠や和尚の教えを聞かない。
- (3) 信施をためにし、誓約を破り、そして信施を享受す

る。

(4) 調伏され、馴らされているボサツを見ても慢心があつて敬意を払わない。

以上の文は『大宝積經』普明菩薩會とよく一致している。⁽⁵⁾

(1) 読誦經典而生戲論、不隨法行。

(2) 不能奉順恭敬師長。

(3) 令心歡悅損他供養、自違本誓而受信施。

(4) 見善菩薩輕慢不敬。

以上の文から「敗壞」の原語である *khatunka* (*khadunka*) の本来の意味「未調教の」という意味が了解されるとはいえないであろう。この四法と対比して望ましいボサツの例に *ajāneya* (調教された) ということが出てくるが、このことばは *khatunka* と対語になることばであるが、ボサツの資質をこれらの二語によって表現できるような特徴的内容であるとは必ずしも言えない。そのことは敗壞と関係なくこの四法の内容と類似する文が他の經典にもあらわれるからである。例えば『護国尊者所問經』の中に次のような文がある。⁽⁷⁾

ラーシマトラバーラよ、次の四つはボサツにとつての墮落の法である。

(1) 長上者を恭敬しない。

(2) 恩を知らず、諂曲であること。

(3) 利得、名聞を求める。

(4) 善をいつわり、邪な利得を得る。

ここでの四法は、『迦葉品』の場合と同様に、対比する四法を説くものであるが、『迦葉品』と全く一致する四法はない。ただ、各項目のなかで趣旨の同じものがあることは、この例で解るであろう。

『迦葉品』にいう「敗壞」の意味が、内容から我慢、おごり、慢心を意味していることが了解される。『護国尊者所問經』でもやはり傲慢、慢心をいつてることが解るが、とくに「敗壞」という語を使用していない。

それでは「敗壞」とは具体的に何を意味しているのであろうか、『經論』の中に求めてみよう。⁽⁸⁾

この四法について『經論』では、次のようにいう。

仏語迦棄、菩薩有四種不調散壞之相、何等為四、誦誦經典而生戲論、法及順法不隨而行、於諸教誨中不調散壞、如是等四法。

ここでは經の文が省略されている。チベット訳も同様である。⁽⁹⁾「敗壞」は『經論』で「不調散壞」である。またチベット訳は『迦葉品』と同様に *dmu-rgod* ⁽¹⁰⁾ である。また「喻如惡馬」とあり、チベット訳も同様である。

『經論』では不調散壞の因として次のようにいう。⁽¹¹⁾

何者不調散壞四法、一者處不調散壞、二者發行中不調散壞、三者受用不調散壞、四者共住不調散壞、是中不調散壞者、名為不善調伏故、喻如惡馬、此諸不調散壞四法。

ここにいる処、發行、受用、住、はチベット訳でそれぞれ gnas, hiupa, yois su spyod, hrogs pa となつており一致する。註釈は、ボサツ行のさまたげになるから不調散壞の法というのであり、まず敗壞の四法の(1)に関して、これは修行処による不調散壞の因であるという。ここで、惡馬の譬喩がであるが、未調教の馬と同じであるという。またボサツは多聞であるとき、多聞のゆえに心が調伏できない。つまり心に混乱が生じて教誨中における法行を正しく受けることができないという。このことを發行中不調教の因とよんでいる。たとえば未調教の惡馬は、正しい道にむけても、未調教であるゆえに惡道に向うのであるという。また諸の教誨の中にあつて心が顛倒して分別の念が起るから、信施の意味をそこねたり、恭敬者の心をそこねたりするのであつて、これを受用中不調散壞の因と名づけるという。それは調教された馬と、未調教の馬が同一処にいるとき、調教された馬と行動が異なることをいうのである。そして未調伏のボサツを調伏のボサツとが同一処にいることは、どちらのボサツもそのことを棄しまないし悦ばないという。これを共住不調散壞という。ここにいる調とは、根の調勝のゆえであり、伏とは一心に惡を滅して勝行を得るからであるという。以上漢訳の註釈に対して、チベット訳もほぼ同一の内容である。要約すれば、聞法の場合における混乱は法の理解を得る道のさまたげになり、信

施を邪見をもつて受用することは善調伏の馬の中に不調散壞の馬がいて、その動きが違ふようなものであるという。つまり信施の意義が失なわれてしまうという。また善調伏のボサツの中に不調散壞のボサツが同一処にいることは、そのことが苦惱をもたらすことになるし、不調散壞のボサツの中に善調伏のボサツがいても同様なことになるという。

『經論』はたびたび馬に関する喩を引くがこれは『迦葉品』にも不調散壞（散壞）について喩が出ることに無関係ではないであらう。とくにサンスクリット本一〇八章では、ヨーガ行にはげむ比丘が心の動搖を制御するのはちょうど馬を御するのと同じであるという文をあげている。このことから『迦葉品』は「敗壞」が馬に関する意味のあることを知っていたことになる。

『經論』は見てきたように、敗壞の因について四つをあげるが、これは善調のボサツの中にあつて敗壞のボサツが、場所、仲間に加わること、布施を受けること、共に生活すること、というような場合に起こりうる相互の混乱をあげるものであつて、そこに敗壞のボサツの教団内における位置づけが自から示されているといえよう。ここでは『經論』の敗壞のボサツに対する立場が読みとれるといつてよいのではなからうか。これを『論』の立場と比較すると、まずボサツを阿惟越致と惟越致に分類し、阿惟越致は五法を具足したボサツで

あり、惟越致は二つに分類される。すなはち一つには敗壞のボサツ、二つには漸々転進のボサツであつて、漸々転進のボサツがやがて阿惟越致に致るとされる。ただ敗壞のボサツも全く阿惟越致から見はなされた存在ではない。このことは後にふれる。

ここで、これらのボサツ、とくに敗壞のボサツのような修行者がどのように扱われるかが問題となる。『經論』は敗壞の因をあげたが、ボサツの理想としては正行としての三十二法をおさめることであつて、これは『迦葉品』に説かれるものである。⁽¹⁵⁾ 多少問題のあるところであるが、『撰大乘論』にもこれと似た記述があり、註釈として十六業あげるとは周知のことである。⁽¹⁶⁾ ここではもはや敗壞のボサツは問題とされることはない。『經論』では調順不調順が辺壞事である⁽¹⁷⁾と云べる。ところが『論』の中ではこれに関して言及するのである。

その前に、この敗壞のボサツが出家者であるか、在家者であるか検討しておこう。サンスクリット本一〇七章には比丘として、一一一章以下に pravrajita 出家者という語が出てくる。『迦葉品』は、出家のボサツ（比丘）の所行について説かれていると見てよい。因みに在家ボサツについての言及はない。その『迦葉品』を引用する『論』は、四法品第十九に「在家・出家のボサツは応に四詔曲の法を遠離すべし。云々」

とあつて、そのあと「ボサツを敗壞する行は四詔曲なり」とあるから、ここでの「敗壞」のボサツは出家・在家の双方に相当してもよいことになる。これは『論』の構成上からも、出家ボサツ、在家ボサツ共行を説く部分であるから当然のことである。ここで明確に『迦葉品』と『論』とのボサツに対する觀念が相違することが解かるのであるが、『論』はもと

もと、ボサツの種類を数多く出しており、軟心のボサツ、堅心のボサツ⁽²⁰⁾という分類もしている。敗壞のボサツは軟心のボサツに入ることはいふまでもない。さらに『論』ボサツの觀念の拡大ということを念頭におきつつ、『論』は独自の説ではなくて『郁伽長者所問經』から次のような人々を列挙している。⁽²¹⁾ ①法を説く者（説法者）②持律者③修多羅を読む者④摩多羅迦を読む者⑤菩薩藏を読む者⑥阿練若を作す者⑦納衣を著する者⑧乞食者⑨一食者⑩常坐者⑪中をすぎて漿を飲まざる者⑫但だ三衣の者⑬褐衣を著する者⑭随つて教坐する者⑮樹下にある者⑯塚間に在る者⑰空地に在る者⑱少欲の者⑲知足の者⑳遠離の者㉑坐禪の者㉒勸仕の者。『郁伽長者所問經』では、これらの人々は出家の比丘であつて、在家ボサツはこれらの人々に奉事すべきであると説いている。在家ボサツのいなすべき事を示している点と、種々の修行者（ボサツ）のいたことが知られることでこの記述は興味深い。これだけ分業がすすんでいると種々の性格のボサツがいることは想像に難

くないであろう。

在家のボサツは持戒の比丘に愛敬の心を生ずべきであるが、もし破戒の比丘に対しては、輕慧の心を生ずべきであるかという問に対しては、在家のボサツがもし破戒の比丘を見れば、応に瞋恨輕慢の心を生じてはならない。応に憐愍利益の心を生ずべきであるという。⁽²²⁾この思想の根拠は『郁伽長者所問經』による出家者優位の考え方である。「是の如き在家のボサツは応に破戒の比丘に於いて憐愍を生ずべし。是の人、垢行、惡行、不善なり。何を以ての故に。是の人、如来善寂滅聖王の法衣を被り自ら善く輒せず諸根を調伏すること能わず、敗壞の行を行す」⁽²³⁾。

ここで敗壞のボサツを救済するのは在家のボサツなのである。敗壞のボサツとよばれるのは「破戒の比丘」と『論』では主張するがこれはまさに『護國尊者所問經』にあげられる惡行の比丘、酒を飲んでうろつきまれる破戒の比丘のことであろう。⁽²⁴⁾

まさしく『經論』においては、善調のボサツと敗壞のボサツとを切り離して考えていたものを『論』は出家、在家の立場からそれをまとめようとする。『迦葉品』もまた出家のボサツに関する言及が中心であった。ところが『郁伽長者所問經』の所論を引用して出家ボサツの墮落を在家ボサツによって糺そうとするのである。『郁伽長者所問經』の本意は、家

をすてて出家者になることをすすめる内容であることはよく知られている。そして『論』もそれにならって在家の欠点を列挙するのであるが、これは『郁伽長者所問經』からの引用である。⁽²⁵⁾

因みに『大智度論』にも敗壞のボサツの言及があることはすでに指摘されているが、このボサツは、菩提心を発したのに善縁に遇うことができないで、五蓋で心が覆われており行為が難転している者のことである。身は大富貴を受けて、国王大鬼神神王等になるが、前世には身口意の惡業を造り、清淨でなかったために、かれは諸仏の前、天上、人中の罪のない処に生まれることができないという。このボサツは菩提心を失つていても、先世の因縁で布施を好んで多くの衆生を悩ますという。ここにいう『大智度論』の敗壞のボサツは、明らかに『論』の所説と相違している。⁽²⁶⁾

このようにみると、「敗壞」なる語はボサツの性格を示すことばとして定着しつつありながらも、これが後に広くゆきわたることはなかった。修行者（ボサツ）として戒行を守り、修行の楷梯を踏んで、修行を全うすること（たとえば十地のボサツ、瑜伽行のボサツなど）があくまでも仏道修行者としての正統な方法であるからである。しかし、一方で世俗倫理上からも、また戒律上からも問題のある修行者が多く出現したことも、『護國尊者所問經』の例をみるまでもなく、事

実である。むしろこのことを正面から問題にするのが初期大乘經典の特徴であると言つてよい。その典型が、たまたま敗壞のボサツとして注目されたにすぎないのである。

以後の大乘仏教の展開は、いかにしてあるべき仏教の姿の戻してゆくかという運動でもあった。まさに『経論』の立場がその役目の一端を荷なっているように考えられる。

- 1 拙稿『十住毘婆沙論』における菩薩思想成立の背景——敗壞菩薩考——（『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教』平楽寺書店、平成元年）四一五頁以下参照。
- 2 高崎直道『如来藏思想の形成』春秋社、昭四九、四四八頁以下参照。
- 3 高崎『宝積経論』と『瑜伽論撰決択分』（『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教』平楽寺書店、平成元年）四七三頁以下参照。
- 4 A von Stiel-Holstein, *The Kāśyapaparivarta, a Mahāyāna-sūtra of the Ratnakūṭa Class, edited in the Original Sanskrit, in Tibetan and in Chinese*. (『大宝積経迦葉品梵藏漢六種合刊』) Shanghai, 1926, pp. 20-21. 以下ホルシュタイン刊本と呼ぶ。
- 5 大正一一、六三二頁中。
- 6 ホルシュタイン刊本、一三三頁。
- 7 *Rāṣṭrapālāpīpīcchā sūtra du Mahāyāna*, publié par L. Finot, Biblio Verlag osnabrück, 1970 *Bibliotheca Buddhica* II, p. 17. なお翻訳は『大乘仏典』9 宝積部經典『長尾雅人訳、桜部建訳、中央公論社、昭四九。以下フィノー本と呼ぶ。
- 8 大正二六、二〇九頁下。
- 9 北京版、一〇五卷、一六〇頁四葉二行目より。

初期大乘經典におけるボサツ（八 力）

- 10 北京版、同卷一六〇頁四葉四行目。
- 11 大正一一、二〇九頁下——二一〇頁上。
- 12 北京版、同、四葉三行目から四行目。
- 13 ホルシュタイン刊本 一五八頁——一五九頁。 翻訳八三頁。
- 14 大正二六、三八頁上中。
- 15 ホルシュタイン本、四七頁——五六頁。 翻訳三〇頁——三四頁。このことに關しては、長尾雅人『撰大乘論 和訳と註解』上（インド古典叢書講談社、昭五七）四二五頁以下と（注2）（四三頁以下）に詳細に論じられている。
- 16 大正二六、二一〇頁中。
- 17 ホルシュタイン刊本、一六二頁。
- 18 大正一一、六六頁上中。
- 19 大正同、二一頁上。
- 20 『論』は「入寺品」第十七に列挙している。（大正二六 六三頁上）『郁伽長者所問経』の相当箇所は大正一一、四七七頁上。
- 21 大正二六、六〇頁中。
- 22 大正同、六一頁上。大正一一、四七六頁上。
- 23 フィノー本、二九頁。大正一一、四六三頁上。
- 24 大正二六、六一頁下以下。大正一一、四七六頁上以下。
- 25 杉本卓洲『敗壞の菩薩——人間の理想像と現実相——』（『東北大学印度学講座六十五周年記念論集 インド思想における人間観』平楽寺書店、平成三年）四一五頁以下参照。
- 26 大正二五、二七一頁上中。
- 27 前掲、拙稿 四二五頁——四二六頁。
- 28

〈キーワード〉 十住毘婆沙論、迦葉品、敗壞のボサツ

（北海道武蔵女子短期大学教授）